音楽祭とトーンハレのオッテンザマー兄弟

スイス中央部ルツェルン州に隣接する高級リゾート地ビュルゲンシュトックで10年前から開催されている「ビュルゲンシュトック・フェスティヴァル」は、4年前からチューリヒでオープニングを飾るようになってから知名度が増した。コロナ禍で昨年中止されていなければ10周年を飾るはずだった今年、チューリッヒの中心地にあるライヴハウス、「カウフロイテン」へ取材に出かけた（2月1日）。

今年のテーマは「反対」。「もう萎縮せずにライヴを楽しもう」と、感染防止対策で元気のない音楽界にポジティヴな風を吹き込もうという気合いがステージからも感じられた。芸術監督のアンドレアス・オッテンザマーとホセ・ガヤルドがガーシュウィン「3つの前奏曲」第1番（クラリネット&ピアノ版）で始めたオープニング・コンサートは、ヴィンタートゥール・ムジークコレギウムのコンサートマスターから首席指揮者に就任したロベルト・ゴンザレス=モンハス、4度目の出演となるヴィオラの赤坂智子、チェロのマキシミリアン・ホルヌングを呼んで、モーツァルト「ピアノ四重奏曲第1番」から第1楽章に続き、鮮やかなコンビネーションを聴かせた。ゲスト・ソリストはギターのティボー・ガルシアがアルベニス《アストゥリアス》とヘラルド・マトス・ロドリゲス《ラ・クンパルシータ》を、ヴァイオリンのレイ・チェンがサラサーテ「スペイン舞曲第2番《ハバネラ》」を演奏した。ヴァイオリンはまたゴンザレス=モンハスに代わり、モーツァルト「ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲」、そして全員で、オッテンザマーがロックダウン中、室内楽用に編曲したメンデルスゾーン「無言歌集」で集中力を研ぎ澄ました。いままで目立たなかったチェリストもドビュッシー「チェロ・ソナタ」から第2、3楽章を披露し、前述の「ピアノ四重奏曲」の第3楽章でプログラムを終えた。アンコールはボッケリーニのギター五重奏曲《ファンダンゴ》とピアソラ《カフェ1930》で盛り上がって終演となった。聴衆をふくむ全員が一体となってライヴを楽しんでいたのが印象的だった。

兄のダニエル・オッテンザマーもほぼ同時期（2月12日）にトーンハレで、マンフレート・オブレヒト率いるバーデン=バーデン・フィルハーモニー管弦楽団とウェーバー「クラリネット協奏曲第1番」を演奏した。柔らかい音からのクレッシェンド、そして劇的なクライマックスでの高音からアグレッシヴな叫びまですべてがフレーズで結ばれているような詩的な音色が上品で、兄弟聴き比べができるぜいたくを味わった。

後半はアルシス・ヴォカリステン・ミュンヘンとソプラノのレベッカ・メーダー、アルトのジェシー・サントス、テノールは数日前に代役を引き受けたニーノ・アウレリオ・グミュンダー、合唱指導も兼ねたバスのトーマス・グロッパーが粒ぞろいだったモーツァルト「レクイエム」を聴かせた。

二人のオルガ クルチンスカとペレチャッコ

チューリヒ歌劇場の今月の新演出はプーランク《カルメル派修道女の対話》。2月13日の初演を観たが、全員が落ち着いて殉教に向かう修道女たちを体現していた。ティト・チェッケリーニの指揮でプーランクの音楽を色彩豊かに演奏したフィルハーモニア・チューリヒ、イェツケ・メーンセの演出は最小限の表現で観客の想像力を膨らませ、ソリスト陣もほぼ全員が初役とは思えない落ち着きを見せた。エヴェリン・ヘルリッィウスのクロワシー夫人は迫真の演技、マリー修道女長のアリス・クート、リドワーヌ新修道院長のインガ・カルナ、騎士フォルスのトーマス・アーランク、コンスタンスのサンドラ・アマウイそしてブランシュ役のオルガ・クルチンスカの落ち着いた演技と歌唱は印象的だった。

そして、もう一人のオルガ、ペレチャッコはロッシーニ《イタリアのトルコ人》再演から続投しているセリム役のナウエル・ディ・ピエロ、夫役のレナート・ジローラミ、詩人役のピエトロ・スパニョーリもパワーアップした適役さで、今回新しく入ったザイーデ役のチェルシー・ツールフリュー、ナルチーゾ役のミンギー・レイも光った。今年から、古楽アンサンブル「ラ・シンティッラ」の芸術監督に任命されたリッカルド・ミナージの指揮はしっかりした土台の上で遊びも見せたが、古楽ではないロッシーニには全体的にもう少し弾ける元気がほしかった。観客も笑いながら楽しみ、ロシアのウクライナ侵攻で始まった「第二次世界大戦後最悪の日」の重苦しさを一瞬でも忘れさせてくれた。

Foto © Herwig Prammer

演に出演した（2月24日所見）。2019年の新演出ではジュリー・フックスが適役だったフィオリッラを、いくら乗りに乗っているペレチャッコでも超えるのは大変だと思っていたが、実際は肩の力を抜いた歌唱でスターの貫禄を示しつつ、等身大で体当たりの演技を見せた。手紙を読む部分のイタリア語も違和感がなく、さすが元イタリア人（指揮者ミケーレ・マリオッティ）の妻、そしてロッシーニを真面目すぎずに歌えるのも、さすが元ロッシーニ・フェスティバル総裁（ジャンフランコ・マリオッティ）の義娘、期待を裏切らなかった。初